

為弘古墳群

1999年

下松市教育委員会

序 文

下松市は山口県の東南部に位置し、瀬戸内海を海の道として九州や四国と向かい合い、更には、朝鮮半島や中国大陸とも通じております。そして、下松という地名の由来の一つに『百済と交易する港（津）であったので、「クダラツ」と呼ばれていたが、それが訛って「くだまつ」になった』という説があります。このように笠戸湾は、瀬戸内海を東西南北に往来する古代の人々にとって、重要な港であったと思われます。

御案内のように弥生時代以来、古代の日本は主として朝鮮半島を経由して、優れた大陸文化を導入していたことは、考古遺物をはじめ、古事記・日本書紀並びに中国史書や高句麗好太王碑文などで、よく知られています。当時は今のような国境はなく、かなり頻繁に自由な往来があったようで、我が国の各所に多くの古代朝鮮の地名が残っていることも、また紛れもない事実です。多くの渡来人が移住・定着して古代倭人（日本人）を形成し、今日に及んだものと思われます。著名な騎馬民族征服王朝説などにより、戦後、歴史認識は一変いたしました。国際化が云々される今日、歴史上の事実を知ること、また必要不可欠であろうと思われます。

為弘古墳群が所在する花岡地区は、平田川・末武川の上流域に当たり、南に笠戸湾を望むことができます。近世には、萩藩の出先機関である都濃宰判の役所が置かれており、山陽道の宿場町として栄えておりました。今回の発掘調査により、この地域が古代から周南地域において重要な位置を占めていたことが判明しました。

古墳は原形をとどめないほど、盗掘による破壊を受けていましたが、調査が進むにつれて、石室内外から多数の遺物が出土し、また、2号墳の下には弥生時代中頃の高地性集落遺跡も、痕跡的ながら埋存していることが明らかとなりました。これらはすべて下松市民共有の歴史遺産であり、誰もが利用できる研究資料であると同時に、生きた教材となるものであります。

発掘調査報告書を刊行するに当たり、この報告書や出土品が十分に活用され、ひいては、文化財愛護思想の啓発にも一翼を担うよう期待いたします。

最後に、調査に当たって終始御協力いただいた関係者各位並びに炎天下、発掘作業に従事された市民の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

下松市教育委員会

教 育 長 相 本 晃 宏

例 言

- 1 本書は、福祉関係施設（ふくしの里）の建設に伴い調査を実施した、下松市大字生野屋字白迫に所在する為弘古墳群及び周辺遺跡の発掘調査報告書です。
- 2 発掘調査は、平成9年2月3日～8月28日の間に実施しました。
- 3 発掘調査時については、下松市土地開発公社をはじめ、多くの関係機関から多大な御協力をいただきました。
- 4 調査組織は下記のとおりです。

調査主体 下松市教育委員会

事務局	下松市教育委員会社会教育課	課長	戸村宗志
		係長	板村幸人（平成9年度）
		係長	小畑勝敬（平成10年度）

調査員	下松市教育委員会社会教育課	指導員	山本一朗
			下瀬洋一

社会教育主事 原田幸雄

現場	梅田敏秋	加藤裕一	中泉久雄	中野友子	広実実	福永繁
	松本悟	安永只市				

整理	加藤裕一	下瀬洋一	中野友子	藤田忠信
----	------	------	------	------

- 5 調査・報告に際しまして、多くの先生方の御指導・御助言をいただきました。御芳名を記して謝意に変えさせていただきます。なお、敬称は略させていただきます。（五十音順）
小田富士雄 河瀬正利 武末純一 田中良之 中越利夫 中司照世 藤野次史
古瀬清秀 村上久和 森田孝一 山田康弘 九州古文化研究会・山口考古学談話会の諸氏
- 6 本冊子にかかわる遺物・記録類は、下松市教育委員会が保管しています。
- 7 本冊子の方位は磁北です。
- 8 本冊子の執筆・編集は山本が行いました。ただし土器の実測・トレースは加藤が中心となっており、山本が一部を修正しました。

本文目次

I	位置と歴史的環境	1
II	為弘1号墳の調査	3
III	為弘2号墳の調査	17
IV	為弘3号墳の調査	32
V	弥生時代その他の調査	43
VI	まとめ	50
VII	旭山マウンドの調査	51

表目次

第1表	為弘1号墳出土土器観察表	13
第2表	為弘1号墳出土装身具観察表	16
第3表	為弘2号墳出土土器観察表	28
第4表	為弘2号墳出土装身具観察表	31
第5表	為弘3号墳出土土器観察表	41

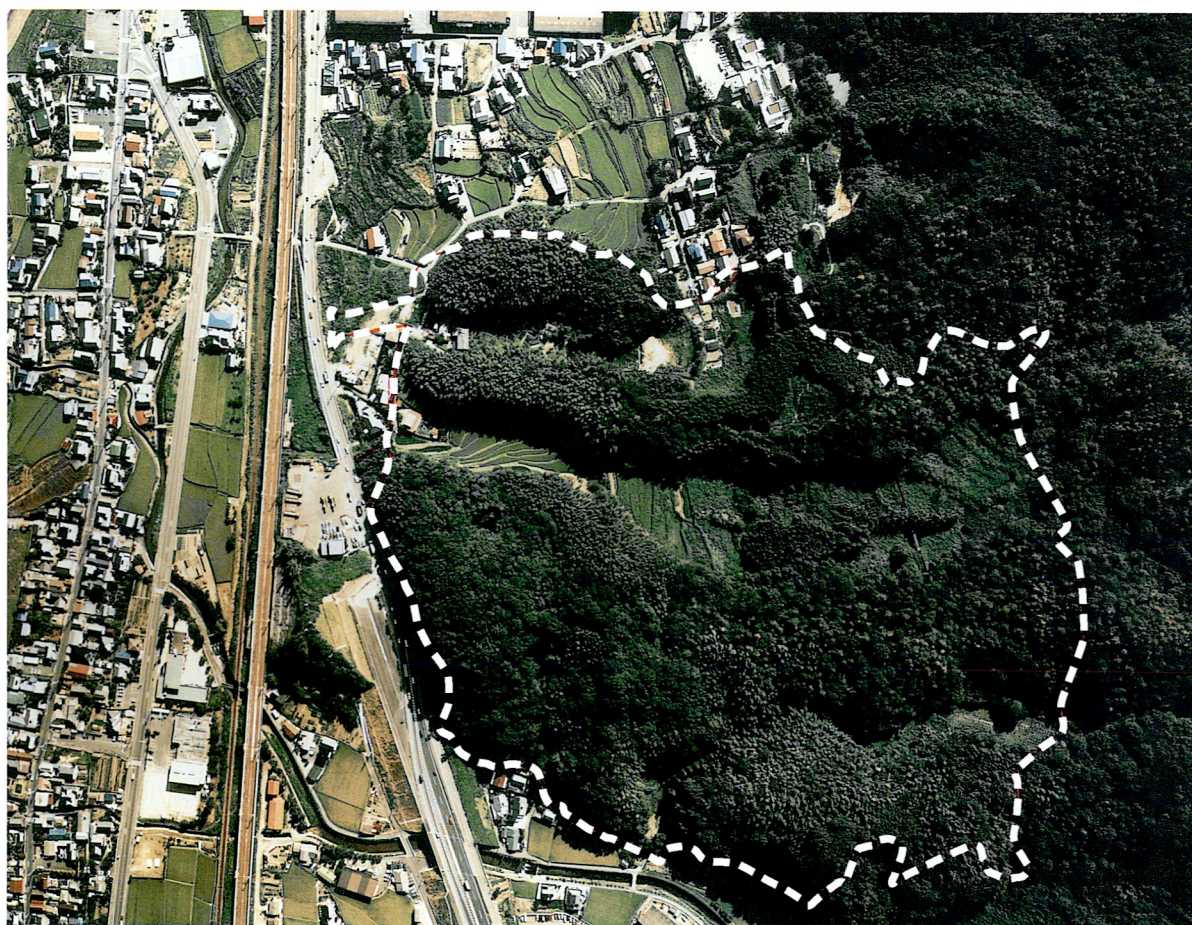
挿図目次

第1図	為弘古墳群と周辺の古墳の位置	1
第2図	為弘古墳群周辺の地形	2
第3図	為弘1号墳墳丘測量図	3
第4図	為弘1号墳南北トレンチ断面 実測図	4
第5図	為弘1号墳東西トレンチ断面 実測図	5
第6図	為弘1号墳石室上面観実測図	5
第7図	為弘1号墳石室平面立面実測図	7
第8図	為弘1号墳床面・遺物出土状況 実測図	8
第9図	為弘1号墳出土土器実測図(1)	9
第10図	為弘1号墳出土土器実測図(2)	10
第11図	為弘1号墳出土装身具実測図	11
第12図	為弘1号墳出土鉄製品実測図(1)	11
第13図	為弘1号墳出土鉄製品実測図(2)	12
第14図	為弘2号墳墳丘測量図	18

第15図	為弘2号墳トレンチ断面実測図	19
第16図	為弘2号墳石室上面観実測図	20
第17図	為弘2号墳石室平面立面実測図	21
第18図	為弘2号墳床面・遺物出土状況 実測図	22
第19図	為弘2号墳出土土器実測図(1)	24
第20図	為弘2号墳出土土器実測図(2)	25
第21図	為弘2号墳出土土器実測図(3)	26
第22図	為弘2号墳出土装身具実測図	26
第23図	為弘2号墳出土鉄製品実測図	27
第24図	為弘3号墳墳丘測量図	33
第25図	為弘3号墳トレンチ断面実測図	34
第26図	為弘3号墳石室上面観実測図	35
第27図	為弘3号墳石室平面立面実測図	36
第28図	為弘3号墳床面・遺物出土状況 実測図	37
第29図	為弘3号墳出土土器実測図(1)	38
第30図	為弘3号墳出土土器実測図(2)	39
第31図	為弘古墳群出土須恵器の ヘラ記号拓影	39
第32図	為弘3号墳出土耳環実測図	39
第33図	為弘3号古墳出土鉄製品実測図	40
第34図	為弘弥生遺跡遺構配置図	43
第35図	為弘遺跡住居址平面断面実測図	44
第36図	為弘遺跡住居址土器出土状況 実測図	44
第37図	為弘遺跡袋状土坑平面断面・ 遺物出土状況実測図	45
第38図	為弘遺跡土坑Y3平面断面実測図	45
第39図	為弘遺跡土坑Y4平面断面実測図	46
第40図	為弘遺跡土坑Y5平面断面実測図	46
第41図	為弘遺跡住居址出土土器実測図	47
第42図	為弘遺跡袋状土坑及び周辺出土 遺物実測図	48
第43図	為弘2号墳出土土器実測図	48
第44図	為弘西丘陵表採土器実測図	49
第45図	旭山マウンド平面断面実測図	51

図 版 目 次

図版 1	為弘 1 号墳(1).....	53	図版 7	為弘 2 号墳(3).....	59
図版 2	為弘 1 号墳(2).....	54	図版 8	為弘 2 号墳(4).....	60
図版 3	為弘 1 号墳(3).....	55	図版 9	為弘 3 号墳(1).....	61
図版 4	為弘 1 号墳(4).....	56	図版10	為弘 3 号墳(2).....	62
図版 5	為弘 2 号墳(1).....	57	図版11	為弘 3 号墳(3).....	63
図版 6	為弘 2 号墳(2).....	58	図版12	為弘遺跡と旭山マウンド.....	64

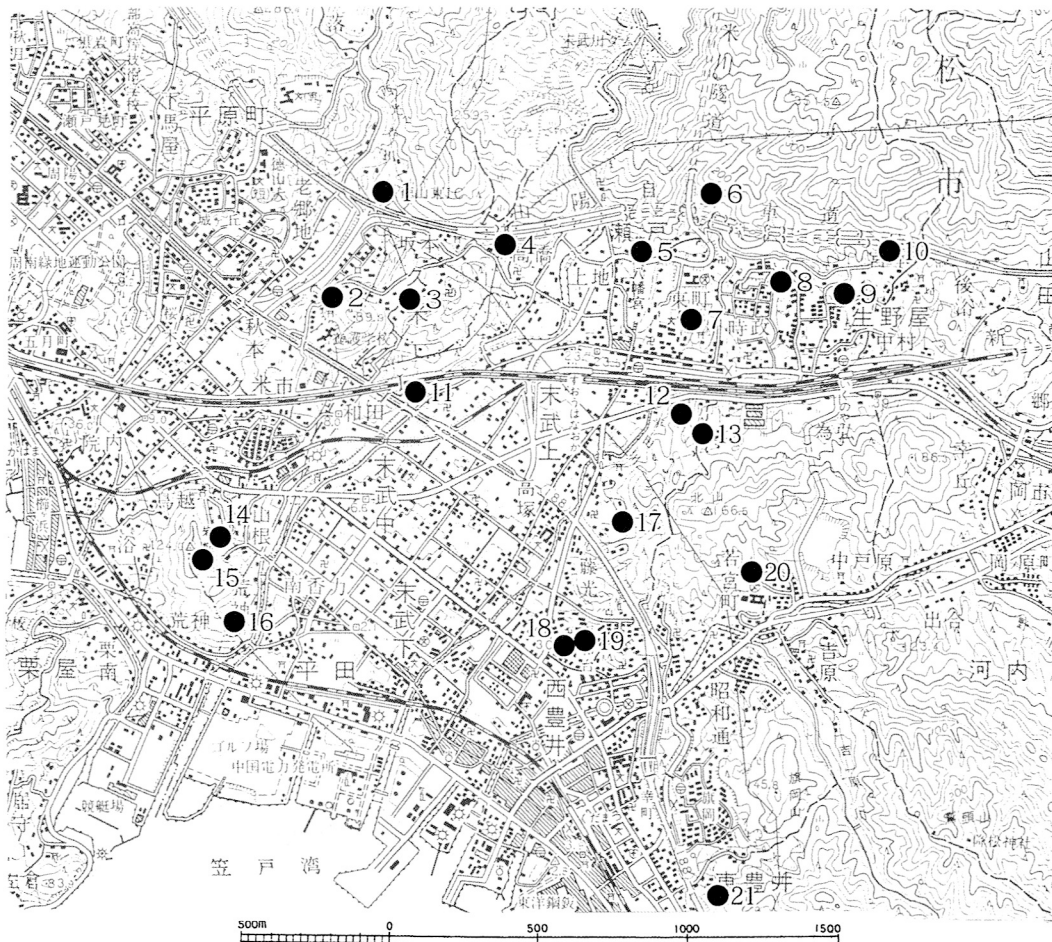


I 位置と歴史的環境

下松市は、山口県の東南部やや中央寄りに位置し、瀬戸内海に面した末武扇状地を市街地とする。現在は、笠戸湾を抱える周南工業地帯の中核として、急速に市街化が進んでいる。

為弘古墳が所在する生野屋地区は、市街地の東北隅に当たり、旧山陽道の花岡宿場に近い。現在では山陽新幹線、JR岩徳線、国道2号線が狭い狭間を並んで走っている。古墳群は海岸山地から流れ出る尾根上にあって、旧山陽道をはじめ、現在の主要な交通路を見下ろす位置にある（第1図）。

末武扇状地ならびにその周辺の丘陵には、幾つかの古代遺跡が存在するが、扇状地部分は幾度かの鉄砲水によって激しく攪乱されており⁽¹⁾、縄文後晩期の土器から現代までの遺物の出土をみるもの（上地遺跡）⁽²⁾、遺構の確認は難しい。また周辺の丘陵地でも市街化の影響を受けて、隠滅した弥生遺跡がある。後期の環濠集落である尾尻遺跡がその代表といえる。尾尻遺跡の向い、扇状地の西縁となる和田丘陵には、弥生前期の環濠集落の宮原遺跡がある⁽³⁾。弥生中期の遺跡としては、為弘古墳群の

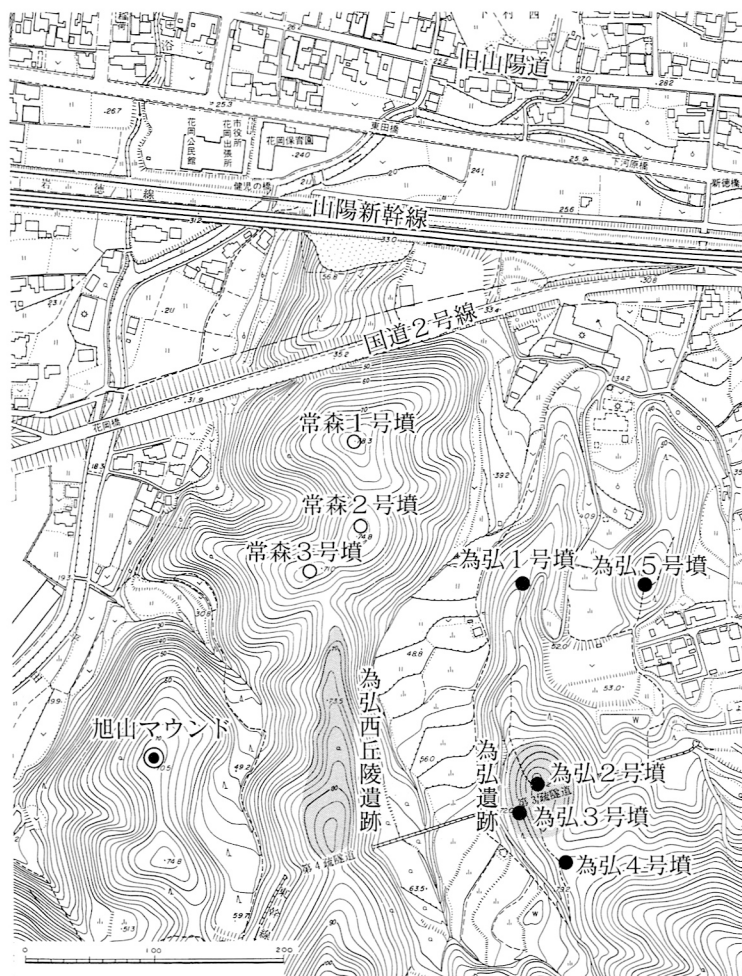


第1図 為弘古墳群と周辺の古墳の位置

- 1 上岡原古墳群 2 岡原古墳群 3 向原古墳群 4 日天寺古墳群（耳取前方後円墳） 5 花岡古墳群
- 6 花岡石棺群 7 花岡前方後円墳 8 惣ヶ迫古墳 9 西村古墳 10 宮本古墳 11 宮原古墳群
- 12 常森古墳群 13 為弘古墳群 14 荒神山石棺群 15 山根古墳 16 荒神山前方後円墳
- 17 御屋敷山古墳 18 天王森西前方後円墳（尾尻古墳群） 19 天王森前方後円墳 20 大河内古墳群
- 21 寺迫古墳

下に眠っていた為弘遺跡があるが、濠溝を持っていないことが判明した。

末武扇状地周辺の古墳としては、三角縁神獣鏡3面を出した著名な宮ノ洲古墳が挙げられる。しかし、笠戸湾に直面する立地のよさのため、戦前に国策的工場用地として接收され、現在全くその痕跡をとどめていない。これに続く首長墓級の前方後円墳としては、編年序列は明らかではないが、いずれも全長50m前後の花岡古墳、天王森古墳、天王森西古墳、さらに30m前後の荒神山古墳があり、最後に6世紀後半になって全長約20mの耳取古墳が続く⁽⁴⁾。耳取古墳出土の円筒埴輪は惣ヶ迫古墳のものに極めて近似しており⁽⁵⁾、同一工房で製作されたものとみら



第2図 為弘古墳群周辺の地形

れる。終末期の群集墳は扇状地両側の丘陵上に群れてはいるが、密集した状態ではない。

為弘古墳群として現在知られている古墳の数は5基であるが、もう一つ西側の尾根で、開けた末武扇状地に面する尾根には3基からなる常森古墳群と、旭山古墳と呼ばれる墳丘状盛り上がりがある(第2図)。これらの古墳群は近接しているので、もともと一まとまりの古墳群として認識されるべきものであったが、これまで一つの群としては認識されていなかったため、小字名を採って別個の古墳群として扱われてきた。しかし調査の結果、両者は別々の古墳群としてもよいような結果が得られた。即ち、為弘古墳群は南方向(山側)に開口しているが、常森古墳群は西方向(平野側)に開口するという明瞭な差が見られたからである。

その後扇状地には末武条里が乗るが、上述のように激しい鉄砲水に破壊されて、今日見られる条里界線は近世以降に、古代のそれを踏襲したものと思われる。

注(1) 山本一朗「末武条里の問題点」『山口県地方史研究』40号 1978年

(2) 富士埜勇ほか『上地遺跡』山口県教育委員会 1973年

(3) 森江直紹ほか『宮原遺跡・上広石遺跡』山口県教育委員会 1973年

(4) 柿本春次ほか『耳取古墳』山口県教育委員会 1973年

(5) 山本一朗『惣ヶ迫古墳』下松市教育委員会 1998年

以上のほかに直接引用はしていないが、鬼武利夫〔「下松市域における古代遺物・遺跡の分布とその概報(その1)」『下松地方史研究』第六輯 1961年〕および、中村徹也〔「原始・古代の下松市」『下松市史』通史編 1989年〕を参考になっている。

Ⅱ 為弘 1 号墳の調査

1 墳 丘

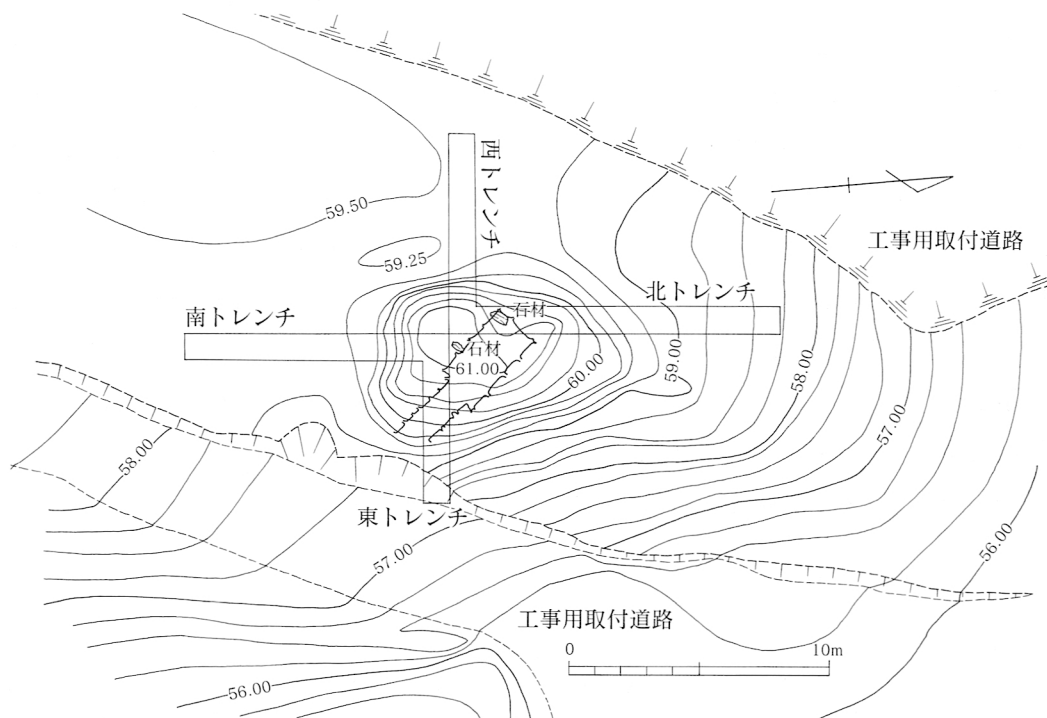
1号墳は、為弘1～4号墳が乗る尾根の先端のもっとも低いところ（標高61m）に所在する。古墳の北側がこの尾根の先端で緩い傾斜となって落ちていくが、南側（山側）は比較的平坦で墓地として利用されていたが、調査時点では移転されて更地となっていた。

残存する墳丘は第3図にみるように、南北にやや長い楕円形で、長軸（南北）10.5m、短軸（東西）6.5m、高さ1.4mを計った。調査者らは、被葬者の生前の主な活躍の舞台であったと思われる旧山陽道（北）方向に開口するものと考えて、南北方向に主軸を持つトレンチを設定して調査を開始したが、実際には第3図のように東側の小さな谷の奥の方向（東南）に開口していた。

墳丘の構造をもっとも遺存状況のよい北トレンチの調査記録によって復元するならば（第4図）、花崗岩の風化土のわずかな高まりを利用して、外側から内側へ傾斜するように、およそ1m余り土を盛り上げる。その時、多少は撞き固めているだろうが、版築を形成するまでには至らない。そして石室の大きさに適合する掘り込みを中央に穿って石室を構築している。石材の組み上げに応じて間隙を埋めながら順次に土を盛り上げてゆき、最終的には天井を覆うまでになるが、記録をもとに墳丘の大きさを復元すれば、直径は約10m、高さは2.5mを越えることはないと思われる。

2 埋葬施設

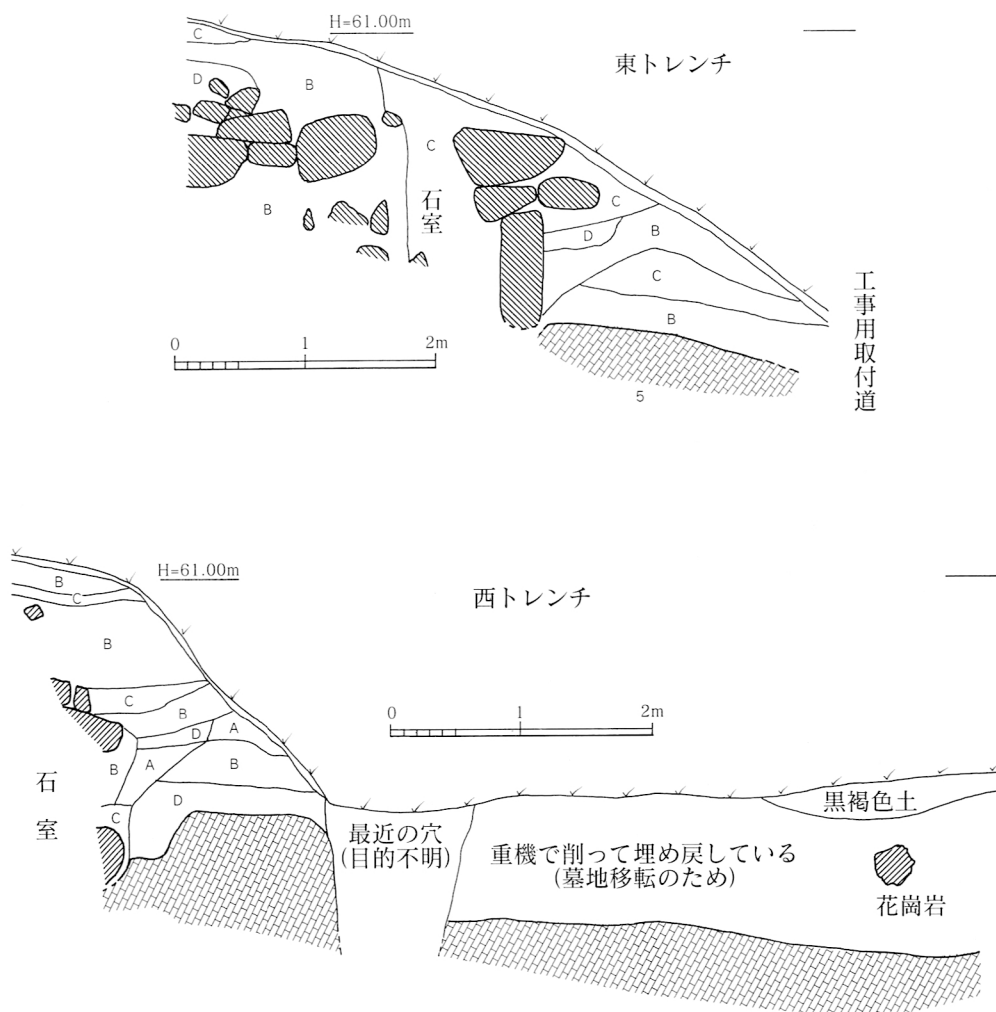
南東方向に開口する両袖型の横穴式石室である。もちろん盗掘による破壊を受けてはいたが、比較



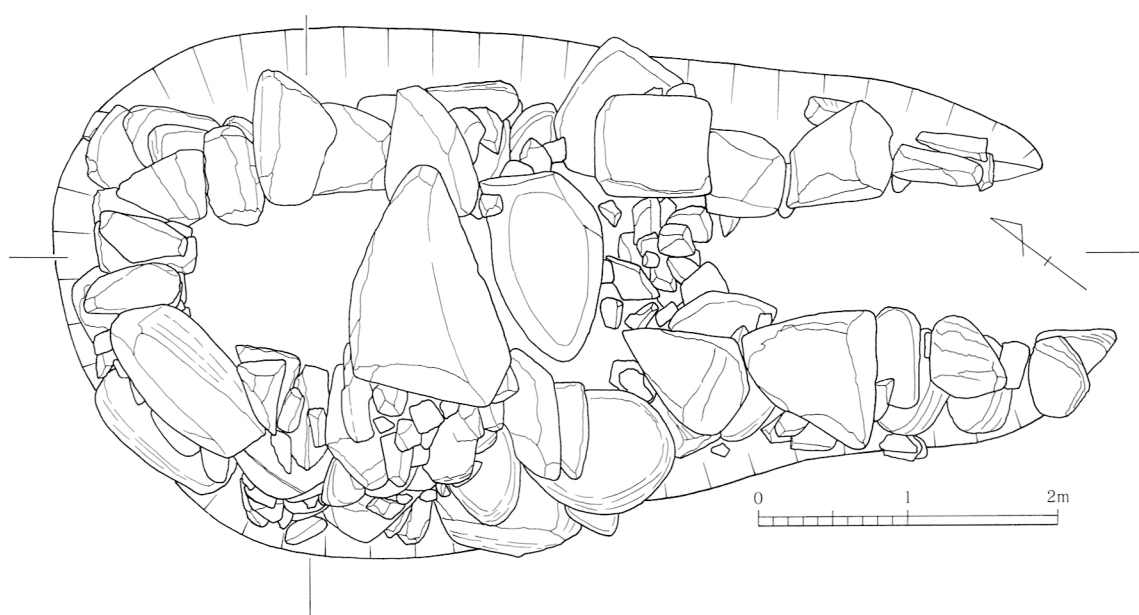
第3図 為弘1号墳墳丘測量図



第4図 為弘1号墳南北トレンチ断面実測図



第5図 為弘1号墳東西トレンチ断面実測図



第6図 為弘1号墳石室上面観実測図

的に保存状況がよく、第6図に見るように2個の天井石が残っていた。大きいほうの三角形の天井石は本来の状況を保っているが、小さい方はその大きさから、元は羨道部に掛かっていたものが玄門部に落ち込んだ状況であった。ところでこの天井石の存在は調査の進行上に問題があった。小さいほうは落ち込みであるから、除去するのに問題はないが、大きい方は本来の位置を保っていると思われるので最後まで残して、石室展開図などにも記録すべきであった。しかし極めて不安定で、下を掘ったら崩落する危険が大きかった。結局人命には代えられないので、図と写真を残して二つとも重機で除去した。その時、支えを失って不安定になった側壁の一部も崩落したが、止むを得ないことと思われた。

玄室の平面形はほぼ長方形で中心軸で測れば、長軸が3.4m、短軸が1.7mであるが、西側壁（実際には北西であるが、便宜上略す。以下及び表も同じ）が東側壁（西側壁の場合と同じ）に比べて約40cm短い。羨道の平面形は八字形に幾分開いており、大きさは、地形的な制約に加えて石材の抜き取り痕の有無を考慮すれば、西側壁は原形を保っていると思われるので、それで測ると長さが2.6m、幅が中央部で96cmである。合わせて石室の全長は丁度6m前後となる（第7図）。

奥壁は4個の整った石材を2個ずつ並行に2段ほど積み上げ、その上は30cm程度の自然石を表の面を揃えるように横に並べている。ちなみに奥壁右の腰石がこの古墳ではもっとも大きく整っている。両側壁は、基部に長方形の自然石を面を揃えて並べているが、上面は強いて揃えようとはしていないようである。しかし羨道部の西側壁においては、下に板石を噛ませるなどして、上面を揃えている。2段目以上は玄室・羨道ともに特に規則性は認められず、形も大きさもまちまちな自然石を、お互いの長短を埋め合わせるように組み上げている。両袖には、奥壁部に次いで大きな石材を各々約40cm中に入れて立て置き、玄門部を造る。床には上面が平坦になるように15～30cm程度の自然石を殆ど隙間なく敷き並べている。

玄室内法の高さを遺存状況のよいところで測ると、床面からおよそ1.9mである。また羨道部では高さ約1.5mを測る。

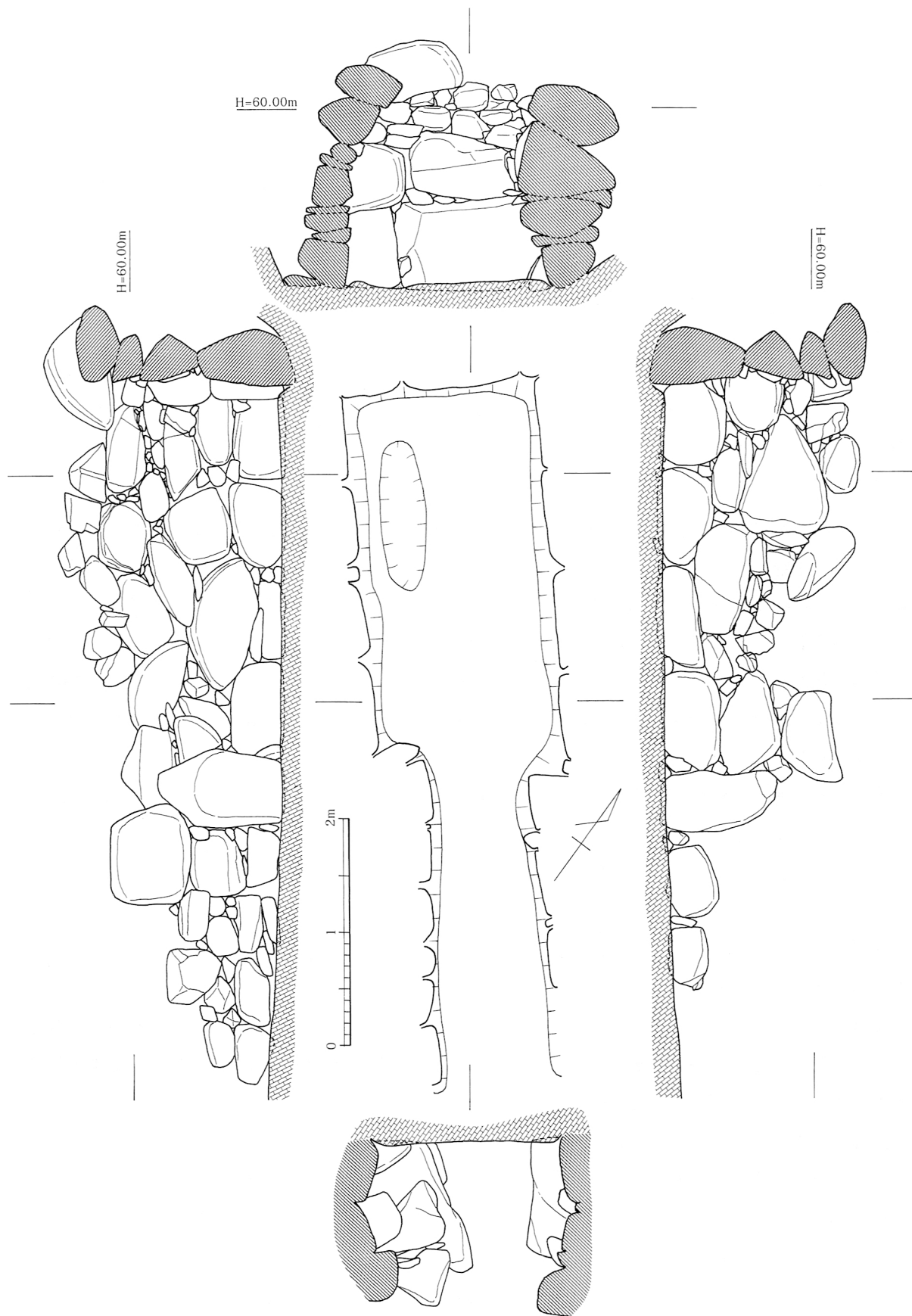
3 出土遺物

墳丘は著しく破壊されており、古墳に関する遺物は全く発見できなかったもので、以下の遺物はすべて石室内で、検出したものである。

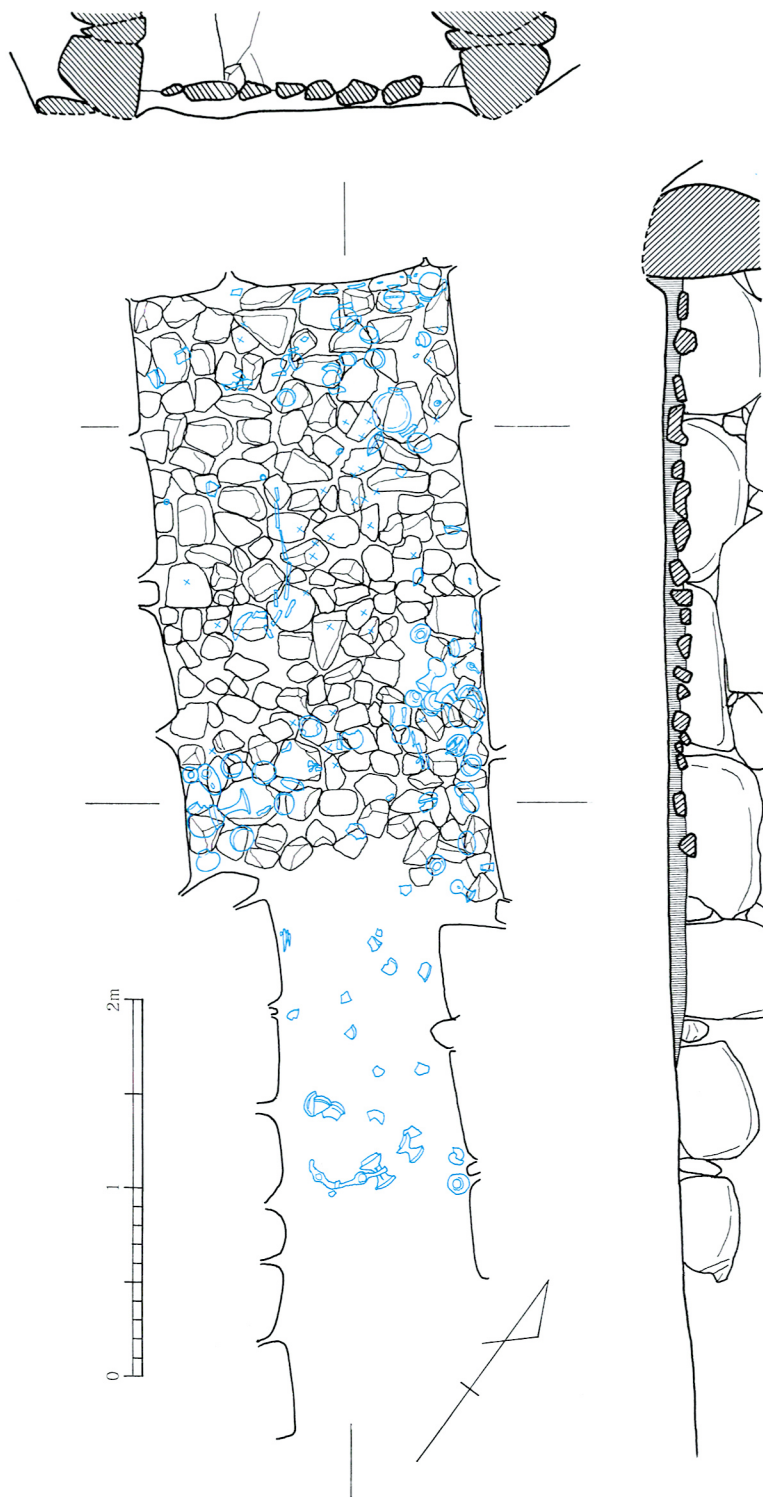
出土状況（第8図） ある程度のまとまりがみられる。まず奥壁部右側に中心をもつグループがあって、土器と鋤先などの鉄製品が多く出土した。またガラス製と土製の小玉が奥壁に接して出土しているが、これらは中央部から弾き飛ばされたものと思われる。

両袖部にもそれぞれのグループがあって、土器と鉄製品が出土した。この部分でも管玉や平玉などが中央寄りに出土しているが、これも中央部から移動してきたものと思われる。ここで注目されたのは東袖部のグループで、鉄鏃中心に多くの鉄製品が出土したが、中でも坏身の中に入れられた状態で出土した数本の鉄鏃が目をつけた。

中央部には、やや西寄りに大刀1振を中心に土製小玉を主とする玉類と、奥壁寄りにほぼ平行に並んで4個の耳環が出土しており、埋葬状況を示すものと思われるが、2個は大きさや表面材が釣り合わず、対をなすものとは思えない（第11図1～4）。中央部には土器は少なく、鉄製品のほうが数的



第7図 為弘1号墳石室平面立面実測図



第8図 為弘1号墳床面・遺物出土状況実測図

個体（第9図45・46・48～53）、提瓶が6個体（第10図54～59）と数的に多いのが目立つほか、第9図36のような異形の蓋形土器もあり、管見には類例がない。

土器についての詳細は観察表（第1表）に記載している。またヘラ記号については第IV章で集成して拓影を掲げている。

装身具（第11図） 耳環は銅芯渡銀の2と3が奥壁から約80cm南で、石室の主軸線を挟んで左右に並んで出土しており、間隔は約40cmでやや離れてはいるが、対をなすものと思われる。それを是認す

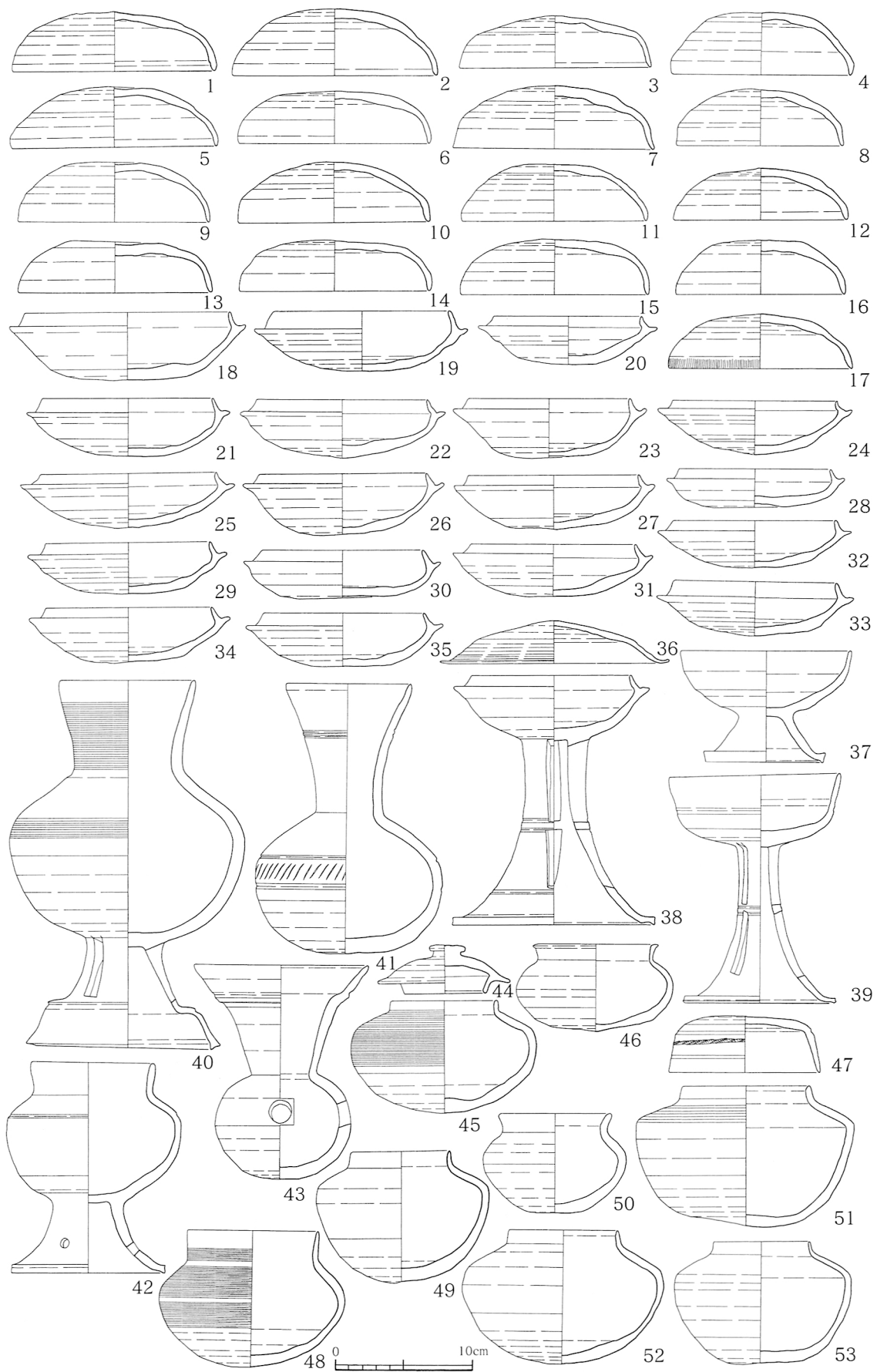
にも多く出土した。

本来の姿を示しているとは思えないが、羨道部中央にも一つのまとまりがあった。中でもほぼ完形の轡1個体と有蓋高杯が重なって出土して注目されたが、羨道の真ん中に位置しており、盗掘などによる攪乱の結果であろうと思われる。

土器（第9・10図） 為弘1号墳出土の土器はすべて須恵器で、土師器はみられなかった。

坏類では身の方が一つ多く17対+1個で35個体が出土した。これらの中には既に小型化したものが含まれている。いま仮に、蓋については口径が130mm以下のもの、身については受部の直径が140mm以下のものについて分布状況を見ると、奥壁部ではなく、袖部及び玄門部から羨道部にかけて分布していた。すなわちこの古墳の出土土器については奥壁部周辺の土器が玄門部付近の土器に比べると幾分古い傾向があるといえよう。しかし蓋の口径が135mm以下、身の受部径が145mm以下とするならば、奥壁部周辺にも該当するものがあるので、その差は大きいものではない。

坏類以外では、小型の短頸壺8

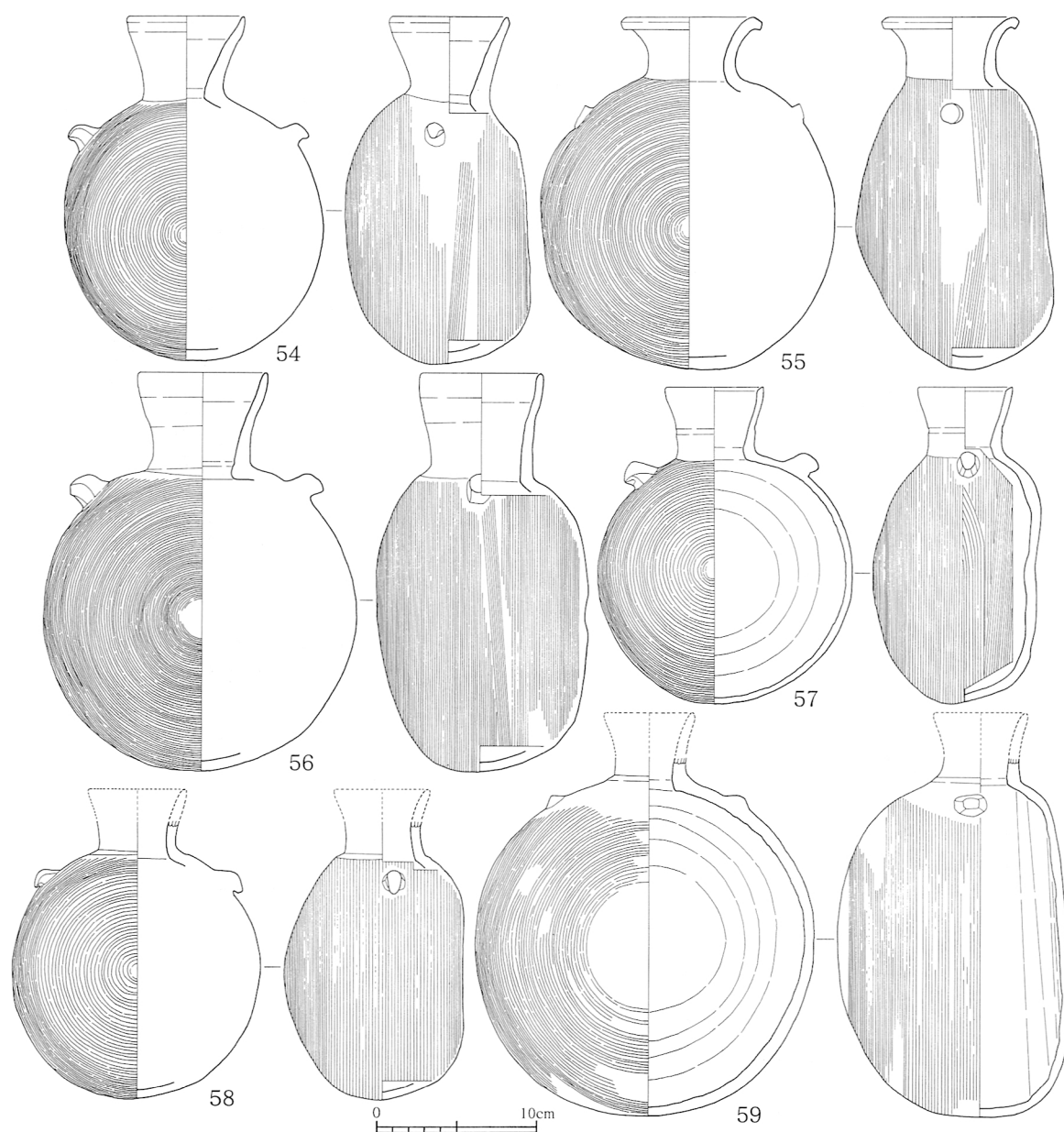


第9図 為弘1号墳出土土器実測図(1)

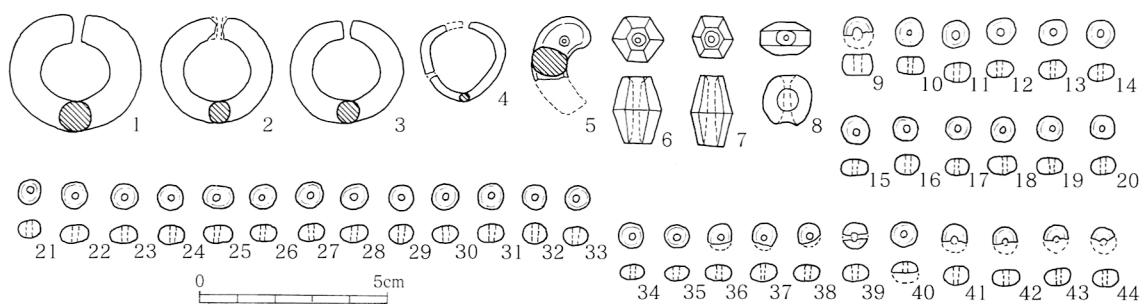
れば、第12図1の大刀は、その被葬者の右腰部に位置し、ガラス小玉2個と土製小玉3個以上が胸のあたり、切小玉2個と土製小玉数個が腰から下に散らばっていたことになる。そうなると残りの2個の耳環はそれぞれ別の対をなすものと思われ、この石室にはほぼ並行に3体が埋葬されたことになるが、幅が50cm以下の棺ならば、3列に並べることも不可能ではない。

装身具の計測値や材質などについては観察表（第2表）に記載している。

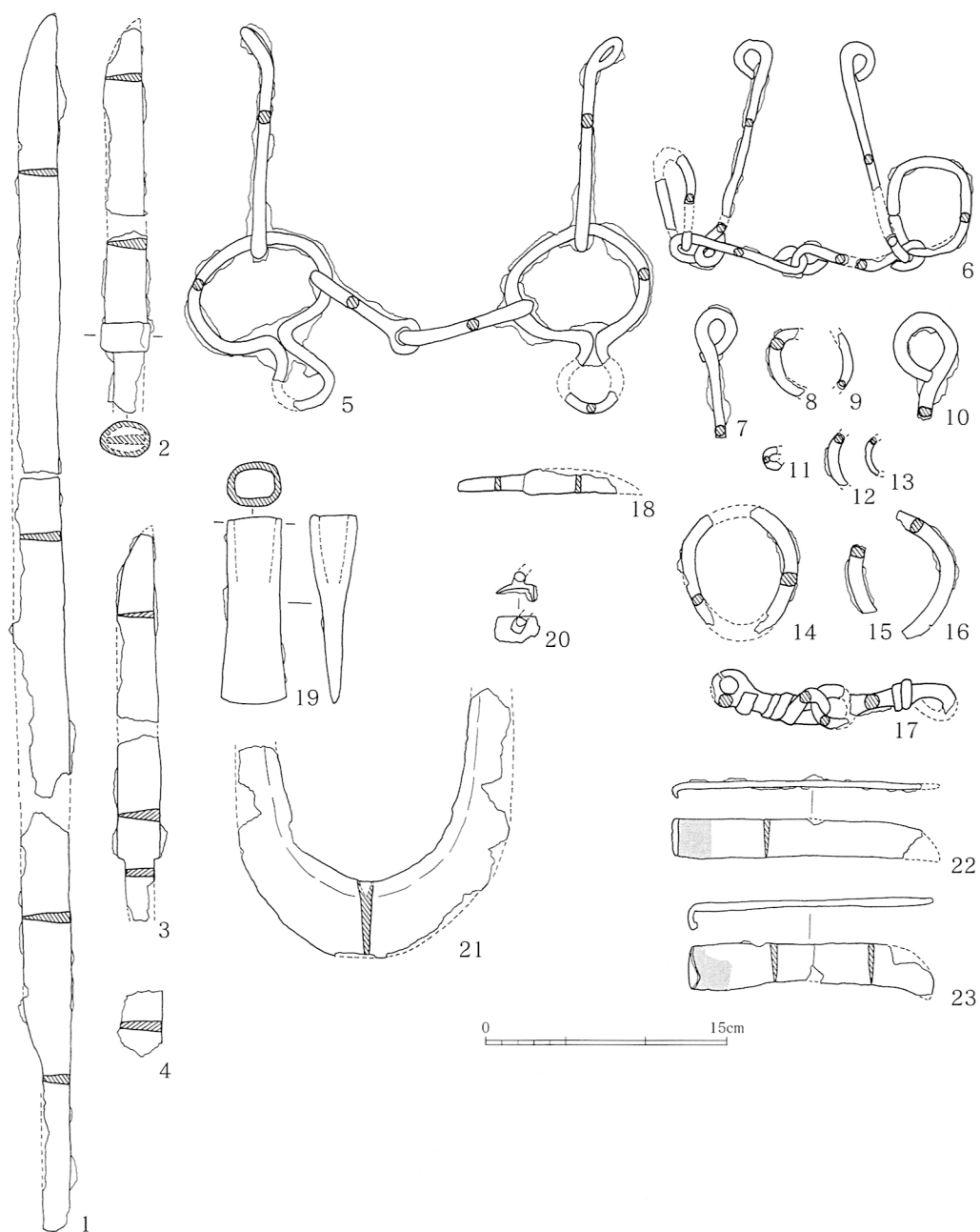
鉄製品（第12・13図） 刃渡りが60cmを超える直刀が1振、刃渡りが20cmを若干超えると思われる小刀が2口、刀子1口がみられる。第12図2の小刀には、多少歪んではいるものの、柄の口金が残っている。



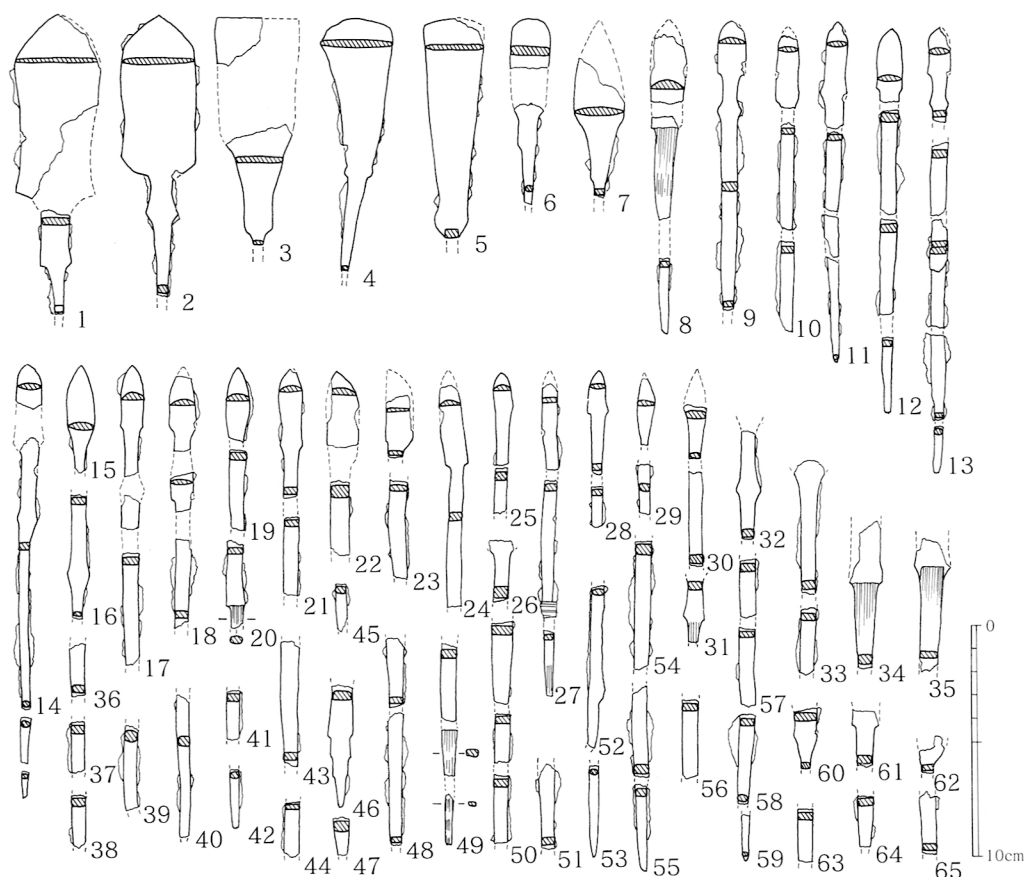
第10図 為弘1号墳出土土器実測図(2)



第11図 為弘 1 号墳出土装身具実測図



第12図 為弘 1 号墳出土鉄製品実測図(1)



第13図 為弘1号墳出土鉄製品実測図(2)

鍔身が一部でも残っている鉄鍔が27本ある（第13図）。平根大形のものには断面が薄い板状を呈するものがあり、実用には疑問を生じるものがある。尖根形式のものは断面がレンズ状ないしカマボコ状を呈するものが多く、片刃のものもみられる。筥被部の長いものは少ないようである。第13図34・35は刀子の可能性も考えられるものである。

轡が3個体分出土した。中でも第13図5は瓢箪鏡板を付けた轡で、ほぼ完形の状態で羨道部中央で検出された。盗掘時に持ち出され、何らかの理由で置き去りにされたものと思われる。第12図6は環状鏡板を持ち、完形に近い状態に復元可能な轡で、奥壁から約50cm離れて中央やや東寄りに出土した。この位置は被葬者の頭部があったと想定される位置に近い。全体に小振りに見えるが、引手は図よりも長くなる可能性はあるし、銜の長さは他のものと変わらないので実用に耐えうるものと思われる。第12図17は端部を本体に巻きつけて環状部を作る銜で、第12図7～16の鉄製品をつないでいけば、1個体の轡に仕上がるものと思われるが、10の引手と思われるものが大きすぎる嫌いがある。これらの大部分は羨門部より約60cm離れて、玄室主軸線のやや東寄りに中心部を置いて出土しているが、3片が中央部に飛ばされていた。もし中心部が原位置を保っていたとすれば被葬者の足元に該当する位置である。

第12図19は全体に長方形を呈する無肩の有袋鉄斧で、古瀬清秀氏分類⁽⁶⁾のA1でも小型の部類に属する。袋部外面につき目は見えないが、鍛造であろうと思われる。全長113mm、刃部幅41mm、基部幅35mm、重さ208gを計る。東袖部側壁際で検出した。

第1表 為弘1号墳石室内出土土器観察表

凡例 番号欄；下段の4桁数字は取り上げ番号 計量欄；受径は受部径、胴径は胴部最大径、裾径は裾部径
調整欄・備考欄；天は天井部、口は口縁部、胴は胴部、底は底部、脚は脚部

番号	器種	出土位置	計量 mm	調 整		色調	焼成	備 考
				外 面	内 面			
1 1183	坏 蓋	中央部	口径 146 器高 43	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部に鈍い段を持つ
2 1115	坏 蓋	東袖部	口径 148 器高 48	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	淡褐色	不良	口縁端部内面を鈍く削ぐ 胎土に細砂を含む
3 1093	坏 蓋	奥 壁 中央部	口径 139 器高 37	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部内面を鈍く削ぐ 焼き歪みが大きい
4 1077	坏 蓋	奥 壁 東 部	口径 130 器高 41	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部外面を鈍く削ぐ 小型化
5 1036	坏 蓋	玄 門 中央部	口径 148 器高 43	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	灰白色	良	口縁端部は丸みを持つ 天井部にへう記号
6 1096	坏 蓋	中央部 東寄り	口径 138 器高 38	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 天井部にへう記号 胎土に細砂
7 1035	坏 蓋	西袖部	口径 145 器高 45	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は外反りで丸みを持つ 胎土に細砂を含む
8 1105	坏 蓋	玄 門 中央部	口径 120 器高 41	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 小型化
9 1047	坏 蓋	東袖部	口径 139 器高 43	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 天井部にへう記号 胎土に細砂
10 1182	坏 蓋	奥壁部 東 隅	口径 138 器高 44	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
11 1090	坏 蓋	奥壁部 東寄り	口径 134 器高 41	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
12 1029	坏 蓋	東袖部	口径 125 器高 37	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	灰白色	良	口縁端部は丸みを持つ 胎土に多量の細砂を含む 小型化
13 1048	坏 蓋	玄 門 中央部	口径 140 器高 37	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	灰白色	良	口縁端部は丸みを持つ 胎土に多量の細砂を含む
14 1052	坏 蓋	東袖部	口径 138 器高 37	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	灰 色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
15 1024	坏 蓋	東袖部	口径 136 器高 40	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂 天井部にへう記号
16 1030	坏 蓋	玄 門 中央部	口径 122 器高 39	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	灰白色	良	口縁端部は丸みを持つ 小型化
17 1009	坏 蓋	羨道部	口径 133 器高 39	天 へラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸く、外面に短沈線 を施す 胎土に細砂を含む
18 1033	坏 身	玄 門 中央部	口径 149 受径 172 器高 49	口 ヨコナデ 底 へラケズリ	口 ヨコナデ 底 ナデ	淡褐色	不良	立ち上がりは内傾し、口縁端部 は丸みを持つ
19 1001	坏 身	羨道部	口径 126 受径 156 器高 43	口 ヨコナデ 底 へラケズリ	口 ヨコナデ 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾してやや長く、 端部は丸みを持つ
20 1005	坏 身	羨道部	口径 107 受径 131 器高 35	口 ヨコナデ 底 へラケズリ	口 ヨコナデ 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は丸みを持つ 小型化
21 1027	坏 身	東袖部	口径 124 受径 149 器高 42	口 ヨコナデ 底 へラケズリ	口 ヨコナデ 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸 みを持つ 胎土に細砂を多量含む
22 1042	坏 身	東袖部	口径 124 受径 150 器高 42	口 ヨコナデ 底 へラケズリ	口 ヨコナデ 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸 みを持つ

番号	器種	出土位置	計量 mm	調 整		色調	焼成	備 考
				外 面	内 面			
23 1064	坏 身	中央部 東壁際	口径 114 受径 141 器高 43	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ 小型化胎土に細砂を含む
24 1068	坏 身	奥壁部 西寄り	口径 120 受径 142 器高 39	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	灰 色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は尖る 胎土に細砂を含む 小型化底部にヘラ記号 焼き歪み大
25 1141	坏 身	中央部 東壁際	口径 128 受径 157 器高 39	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	灰白色	不良	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ
26 1209	坏 身	中央部 東壁際	口径 122 受径 148 器高 44	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
27 1089	坏 身	奥壁部 東寄り	口径 124 受径 147 器高 39	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	灰 色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ
28 1128	坏 身	中央部	口径 110 受径 131 器高 28	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ 小型化胎土に細砂を多量含む
29 1026	坏 身	東袖部	口径 119 受径 145 器高 37	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ 底部にヘラ記号
30 1051	坏 身	東袖部	口径 117 受径 144 器高 35	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
31 1025	坏 身	東袖部	口径 120 受径 147 器高 38	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ 胎土に細砂 底部にヘラ記号
32 1032	坏 身	玄門部	口径 118 受径 135 器高 45	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部は丸みを持つ 小型化胎土に細砂を含む 焼き歪み大
33 1039	坏 身	東袖部 壁 際	口径 119 受径 144 器高 39	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	灰白色	良	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ
34 1038	坏 身	東袖部	口径 121 受径 147 器高 40	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ 底部にヘラ記号
35 1120	坏 身	東袖中 央寄り	口径 117 受径 145 器高 39	口底 ヨコナデ ヘラケズリ	口底 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ 底部にヘラ記号
36 1040	蓋	玄門部 に散在	口径 165 器高 31	天口 ヨコナデ ヘラケズリ	天口 ヨコナデ ヘラケズリ	青灰色	良好	口縁端部は反転する 胎土に砂粒を含む
37 1007	高 杯	羨 道	口径 123 器高 81	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	灰 色	良	ハ字状の低い脚部に碗形の坏部が乗る 透かしはない
38 1012	有蓋 高 杯	羨 道	受径 144 器高 179	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	灰 色	良	2方2段方形透かしの脚部に身形の坏部が乗る 胎土に細砂を含む
39 1056	高 杯	西袖部	口径 124 器高 166	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	坏脚 ヨコナデ ヘラケズリ	灰 色	良好	3方2段方形透かしの脚部に碗形の坏部が乗る 胎土に細砂を含む
40 1098	脚 付 長頸壺	中央部 東寄り	口径 97 胴径 172 器高 267	口頸 胴脚 ヨコナデ ヘラケズリ	口頸 胴脚 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	3方方形透かしの脚部に長頸壺が乗る 胎土に細砂を含む
41 1060	長頸壺	中央部 東寄り	口径 91 胴径 136 器高 194	口頸 胴底 ヨコナデ ヘラケズリ	口頸 胴底 ヨコナデ ナデ	灰 色	良好	頸部に2条の沈線 胴部中央に斜行短沈線を囲む2条沈線 胎土に細砂を含む
42 1080	脚 付 短頸壺	奥壁部 東寄り	口径 87 胴径 127 器高 152	口頸 胴脚 ヨコナデ ヘラケズリ	口頸 胴脚 ヨコナデ ナデ	青灰色	良好	3方円孔透かしを持つハ字状脚部に短頸壺が乗る 肩部に1条沈線 胎土に細砂を含む

番号	器種	出土位置	計量 mm	調 整		色調	焼成	備 考
				外 面	内 面			
43 1041	甌	玄門部 東寄り	口径 126 胴径 99 器高 154	口頸 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口頸 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	球形体部に長く大きく開く口縁部を付ける 胎土に細砂を含む
44 1133	蓋	奥壁部 東寄り	口径 58 器高 35	天 ヘラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	擬宝珠つまみを持ち、かえりが長い 胎土に細砂を含む
45 1061	短頸壺	東袖部	口径 76 胴径 129 器高 96	口 ヨコナデ 胴 カキメ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	偏球形の体部に短い口縁が付く 胎土に細砂を含む
46 1108	短頸壺	中央部	口径 85 胴径 110 器高 63	口 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	著しく偏平な体部に直立口縁が付く 胎土に細砂を含む
47 1122	蓋	中央部 東寄り	口径 110 器高 41	天 ヘラケズリ 口 ヨコナデ	天 ナデ 口 ヨコナデ	青灰色	良好	体部に櫛歯状工具による連続斜行刺突文を巡らす
48 1078	短頸壺	奥壁部 中 央	口径 95 胴径 136 器高 98	口 ヨコナデ 胴 カキメ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	灰 色	良好	球形体部に直立口縁が付く
49 1181	短頸壺	中央部 東寄り	口径 71 胴径 127 器高 95	口 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	肩の張る球形体部に短い口縁が付く 胎土に細砂を含む
50 1011	短頸壺	羨 道	口径 79 胴径 105 器高 72	口 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	球形体部にやや開く短い口縁が付く 焼き歪みが大きい 体部にヘラ記号
51 1058	短頸壺	西袖部	口径 92 胴径 158 器高 102	口 ヨコナデ 胴 カキメ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	鈍い稜をなして屈折する体部に短い口縁が付く 口頸部の焼き歪みが大きい 胎土に細砂を含む
52 1063	短頸壺	中央部 東壁際	口径 79 胴径 147 器高 96	口 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	青灰色	良好	球形体部に短い口縁が付く 胎土に細砂を含む
53 1066	短頸壺	西袖部 壁 際	口径 70 胴径 129 器高 89	口 ヨコナデ 胴 ヨコナデ 底 ヘラケズリ	口 ヨコナデ 体部 ナデ	灰 色	良	やや肩の張る体部に短い口縁を付ける 胎土に細砂を含む
54 1059	提 瓶	西袖部 壁 際	口径 72 器高 215	口頸 ヨコナデ 体部 カキメ	口頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	灰 色	良好	角状把手を持つ
55 1084	提 瓶	奥壁部 東寄り	口径 78 器高 152	口頸 ヨコナデ 体部 カキメ	口頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	青灰色	良好	両把手の先端部を欠損 胎土に細砂を含む
56 1055	提 瓶	西袖部	口径 80 器高 246	口頸 ヨコナデ 体部 カキメ	口頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	灰 色	良好	角状把手を持つ 胎土に細砂を含む
57 1062	提 瓶	中央部 東寄り	口径 62 器高 146	口頸 ヨコナデ 体部 カキメ	口頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	青灰色	良好	角状把手を持つ 胎土に細砂を含む
58 1054	提 瓶	西袖部 中寄り	胴径 155	頸 ヨコナデ 体部 カキメ	頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	青灰色	良好	角状把手を持つ 口縁部を欠損 胎土に細砂を含む
59 1079	提 瓶	奥壁部 中寄り	胴径 213	頸 ヨコナデ 体部 カキメ	頸 ヨコナデ 体部 ヨコナデ	灰白色	不良	ボタン状把手を持つ B面はヘラケズリ 口縁部を欠損 胎土に細砂を含む

第12図21はU字形鍬・鋤先で、台を受ける切れ込みが明瞭に見える。残存刃部幅168mm、長さは先端部で48mm前後である。石室中軸線上で奥壁から約35cm離れて出土した。第12図22・23は鉄鎌である。22は先端部を欠いているが、全長160mm余りに復元可能で、刃部はいくらか湾曲するものと思われる。23も先端部をわずかに欠くが、全長153mmで、刃部は内湾する。両鉄鎌とも柄はほぼ直角に装着されるものである。図のアミ目部分は着柄部と思われるところで、木質は残っていないが、有機質による汚染と思われる変色部分である。22の折り返し部分は欠損でなければ図の通り三角形となる。

注(6) 古瀬清秀「農工具」(『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ 副葬品) 雄山閣 1991年

第2表 為弘1号墳石室内出土装身具観察表

凡例 長さの単位はmm、重さの単位はg 備考欄の4桁数字は取り上げ番号

番号	種類	外径	長さ	断面径	重さ	色調	備考(保存状況)
1	耳環	35.7		8.6	37.73	黄金	1091 銅芯金張(良好)
2	耳環	29.4		6.1	13.06	銀黒	1166 銅芯渡銀(やや錆化)
3	耳環	29.6		6.8	14.68	緑青	1194 銅芯渡銀(全面錆化)
4	耳環	(22.8)		2.6	(0.86)	緑青	1195 銅芯渡銀(不良)
5	勾玉			9.9		濃緑	1208 碧玉製(半分欠損)
6	切小玉	12.6	18.4		4.12	半透明	1143 水晶製(完形)
7	切小玉	10.8	19.2		3.00	半透明	1179 水晶製(完形)
8	平玉	13.4	13.2	9.5	2.71	半透明	1177 水晶製(完形)
9	小玉	8.1	5.4			紺	1174 ガラス製(半分欠損)
10	小玉	7.7	5.5		0.48	紺	1173 ガラス製(完形)
11	小玉	6.6	5.6		0.33	黒	1202-1 土製(完形)
12	小玉	7.2	4.9		0.31	黒	1162 土製(完形)
13	小玉	7.3	5.5		0.28	黒	1205 土製(完形)
14	小玉	7.5	5.3		0.30	黒	1172 土製(完形)
15	小玉	7.9	4.9		0.32	黒	1160 土製(完形)
16	小玉	7.4	5.7		0.29	黒	1157 土製(一部欠損)
17	小玉	7.2	5.2		0.28	黒	1158 土製(完形)
18	小玉	7.6	5.7		0.32	黒	1201-2 土製(完形)
19	小玉	7.4	5.0		0.25	黒	1134 土製(完形)
20	小玉	7.3	5.6		0.30	黒	1159 土製(完形)
21	小玉	6.9	5.6		0.27	黒	1097 土製(完形)
22	小玉	7.5	5.3		0.31	黒	1202-2 土製(完形)
23	小玉	7.8	5.5		0.29	黒	1171 土製(完形)
24	小玉	7.6	5.4		0.35	黒	1187 土製(完形)
25	小玉	8.2	5.4		0.34	黒	1191-2 土製(完形)
26	小玉	7.1	5.2		0.28	黒	1146 土製(完形)
27	小玉	7.5	5.1		0.32	黒	1148 土製(完形)
28	小玉	7.4	5.0		0.24	黒	1161 土製(完形)
29	小玉	7.0	6.2		0.31	黒	1165 土製(完形)
30	小玉	7.4	5.3		0.27	黒	1178 土製(完形)
31	小玉	7.5	5.5		0.29	黒	1201-1 土製(完形)
32	小玉	6.7	5.0		0.28	黒	1123 土製(完形)
33	小玉	7.3	5.9		0.30	黒	1136 土製(完形)
34	小玉	7.1	4.7		0.23	黒	1095 土製(完形)
35	小玉	7.0	4.4		0.22	黒	1156 土製(完形)
36	小玉	7.0	4.9		(0.27)	黒	1206 土製(一部欠損)
37	小玉	7.1	5.8		(0.25)	黒	1191-1 土製(一部欠損)
38	小玉	6.9	5.6		(0.24)	黒	1186-1 土製(一部欠損)
39	小玉	7.9	5.1		(0.23)	黒	1189 土製(半分欠損)
40	小玉	7.0			(0.15)	黒	1155 土製(半分欠損)
41	小玉	7.5	5.4		(0.18)	黒	1175 土製(半分欠損)
42	小玉	7.6	5.0		(0.23)	黒	1183 土製(半分欠損)
43	小玉	7.6	5.1		(0.17)	黒	1204 土製(半分欠損)
44	小玉	7.3	5.9		(0.13)	黒	1153 土製(半分欠損)